欧州における近年のプロジェクトに関する一考察

星野　裕司[1]

[1]正会員　博(工)　熊本大学大学院自然科学研究科（〒860-8555 熊本市中央区黒髪2-39-1,
E-mail:hoshino@kumamoto-u.ac.jp）

2014年4月から10ヶ月間，ドイツのシュトゥットガルトに滞在し，欧州各地の景観デザインに関わるプロジェクトの調査を行った．我が国のプロジェクトと比較した場合，欧州における近年のプロジェクトの特徴は，包括性，戦略性，規範性の3つの特性に整理されると考えた．本稿では，ドイツ，オランダ，スペイン等における特徴的な事例を挙げつつ，それぞれの特性を解説し，今後我が国においても検討すべき点について考察する．

キーワード： *欧州，景観デザインプロジェクト，包括性，戦略性，規範性*

１．はじめに

筆者は大学のサバティカル制度を活用し，2014 年 4 月より 2015 年 2 月までの 10 ヶ月間，ドイツのシュトゥットガルト大学に滞在する機会を得た．滞在中，ドイツを含めて８ヶ国，40 ヶ所以上の都市を訪れ，様々なプロジェクトを調査した．本稿は，それらの調査に基づき，欧州における近年のプロジェクトの全体的な特徴について，我が国のプロジェクトに参加する機会を得ている筆者の経験から考察した結果を報告するものである．

すべての考察は，考察者の能力とともに，時代的・社会的制約を受けるものだろう．そこで本論に入るまえに，昨年度のドイツ，あるいは欧州の状況について概観しておきたい．まず 2014 年のドイツであるが， 7 月にはサッカーW 杯で優勝するという華々しい話題を提供する一方，経済的には失業率も 5%を切り，2015 年における予算案に対して新規国債を発行せずに賄えるとの見通しを発表している．また歴史的には，2014 年 11 月にはベルリンの壁崩壊 25 周年を迎え，翌 2015 年 1 月にはアウシュビッツ収容所解放 70 周年を迎えている．このように，ドイツにおいては戦後積み重ねてきた様々な努力が具体的な形を成してきた年と考えることができるだろう．だが，EU に目を移せば，2014 年は第 1 次世界大戦の発生から 100 周年を迎えると同時に，6 月に開かれた欧州議会選挙では，欧州債務危機への不満などから，各国で反 EU 勢力が躍進するという結果となった．ドイツにおいても，増大する移民への危機感から旧東ドイツのドレスデンを中心とした反イスラム活動 PEGIDA が大規模なデモを展開している．筆者は今後の EU を予測するような能力を持たないが，いずれにせよ，二つの大戦などの過去の問題に対する真摯な反省から生まれた一つの実験的試みが大きな過渡期を迎えているということは言えるだろう．

本稿は，以上のような時代背景の中で見聞した事項について，考察するものである．

２．滞在先の概要

本章では，筆者が滞在した Stuttgart 大学の Institut für Landschaftsplanung und Ökologie（Institute for Landscape Planning and Ecology, ILPOE）について，その概要を示す．当研究室は，Stuttgart 大学の建築・都市計画学部に所属し，2010 年からは Antje Stokman 教授により主宰されている．研究テーマは，Landscape Planning と Ecology の大きく二つに分かれ，前者を Stokman 教授（造園）が，後者を Hans-Georg Schwarz-v. Raumer 博士（地理学）が主に指導しており，それぞれの分野に 5，6 名のスタッフが所属し，シュトゥットガルトにおける都市交通のプロジェクトから，ペルーにおける水問題を解決するための都市デザイン，カザフスタンにおけるエネルギー問題まで，多くの研究プロジェクトを抱えている．Stokman 教授に，プロジェクトのテーマがなぜそこまで多様なのか，という疑問を呈したところ，Stuttgart 大学にはランドスケープや環境に関する研究室が一つしかないから，というシンプルな回答であった．この点，地方大学の教員として共感するところである．

なお Stokman 教授は，欧州の河川デザインについて河川工学，ランドスケープ，都市デザイン等の総合的観点から整理した「River. Space. Design[1]」の共著者の一人であり，社会基盤施設とランドスケープの融合を一つのテーマとしており [2]，筆者が彼女の研究室を滞在先として選択した大きな理由となっている．また当研究室の大きな特徴の一つとして，国際修士コースである Integrated Urbanism and Sustainable Design（IUSD）の運営があげられる．これは，Stuttgart 大学と Ain Shams 大学（エジプト）双方で開催されるダブルディグリープログラムで，建築，都市計画，ランドスケープなどを融合した総合的プログラムであり，ドイツ学術交流会（DAAD)の支援を得て運営されている．学生は 1 年目を Stuttgart 大学で 2 年目を Ain Shams 大学で勉強する．なお，Stokman 教授によると，2015 年夏学期の演習テーマは，アラブ語を使える学生が多いという利点を生かして，シュトゥットガルトにおける難民コミュニティの問題を取り扱うというものであった．我が国と同様，ドイツの大学も国際化は大きなテーマとなっており，IUSD のように，国の方針と整合しつつターゲットを絞ったプログラム運営は，大きく参考になるものであろう．このように，国の方針や国際的な研究テーマに敏感に反応しつつも，現実の課題を発見し提案していくという当研究室の研究姿勢は，筆者にとって大きな刺激を受けるものであった．

３．欧州における特徴

筆者は，ドイツを中心とした様々なプロジェクトを視察した結果，それらに共通する全体的な特徴として，包括性，戦略性，規範性という 3 つの特性を抽出した．当然これら三つの特性は密接に関連しあうものであるが，本章では，それぞれの特性に対して，比較的近年に行われた実例を数例あげながら説明する．なお，ここで紹介する実例に関して，その詳細について論じるには，それぞれ稿を起こす必要があると思うが，本稿では，概要及び論旨に沿ったポイントのみを紹介していく．

(1)包括性

包括性（comprehensive）とは，そのプロジェクトが多目的であり，空間的にも広域的な範囲を対象としているということである．

例えば，研究室として視察に行った Water square Benthemplein[3]は，2013 年に竣工した広場である（**図 1**）．この広場は良質な公共空間を提供すると同時に，雨水を貯留するという機能も有するものであり，都市アイデンティティやコミュニティと環境や気候変動などの課題を一挙に解決するものであった．デザインプロセスにあたっては，入念な住民参加が行われている．このプロジェクトの発端は 2005 年に「Flood」をテーマに行われたロッテルダム国際建築ビエンナーレ（IABR）であり，「Water Plan 2 Rotterdam」（2007）において都市政策と位置付けられ，2014 年に策定された「Rotterdam Climate Change Adaptation Strategy」の主要施設ともなっている．

図 1　Water square Benthemplein

図 2　建設中の分水路と De Oversteek 橋

一方同様にオランダでは，大規模河川事業「ルーム・フォー・ザ・リバー」（Ruimte voor de River, RvdR）が 2006 年から 2015 年にかけて行われている [4]．この事業は，高い堤防等によって洪水を防ぐ・停めるのではなく，水ができるだけ自由に動くことのできる空間を確保しようというものであり，9 タイプの手法に基づき，30 ヶ所以上の場所で同時に実施されている事業である．多くの事業の中でも，最も大規模かつ総合的なものは，Nijmegen-Lent で行われているものであり [5]，この事業単独で EU における「FloodResilienCity」プロジェクトにも採択されている（**図 2**）．この事業は，Rhine 川下流の Waal 川における狭窄部において，堤防の移設や分水路の整備という治水事業と同時に，河川公園や歩道橋の整備，リゾート開発など多数の事業を有する包括的な事業である．当初は，住民の反対が大きかったそうだが，国から事業を押しつけるのではなく，構想に基づいた計画案を，市が持っていた整備構想を踏まえ，住民参加を

通して Nijmegen 市によって立案させ（当市はオランダのハバナと呼ばれるほど，住民の意見が強い場所らしい），その計画を国がバックアップするという体制で実現している．

以上に紹介したプロジェクトは，総合的・広域的な計画のパイロットプロジェクトとして実施されているという性格も強く，また住民との議論が大きな役割を演じていることも特徴である．つまり，広域的な計画と地域内での住民との議論の接点として，プロジェクトが位置付けられることで，包括性が獲得されていると考えることができる．

⑵戦略性

戦略性（strategic）とは，いわば事業の進め方であり，上記に記した包括性に対して，時間軸を意識した上でいかに実現していくかということに関する長期的な計画性を指す．

筆者が暮らしたシュトゥットガルトの都市施設としては，中心部から鉄道沿いに郊外へ延びる全長 8 kmの緑地帯である Green U が著名である．これは，宮廷庭園や荒れ地，採石場跡などを長期に渡って整備しながら完成させたものである．段階的に整備していくにあたって，有効に活用されたのが連邦園芸博覧会である．シュトゥットガルトでは計 5 回開催されており，特に土木分野では，1961 年，1977 年，1993 年の開催に合わせて整備された，レオンハルトおよびシュライヒによる実験的橋梁群が有名であろう．連邦園芸博覧会は，他都市でも同様な機能を果たしており，2013 年にはハンブルグで開催されているが，2006 年から 2013 年にかけて行われた IBA（国際建築博覧会）と連携し，開発が遅れていた Elbe 川中洲地区に高質な公共空間を提供している．

連邦園芸博覧会とは別に，各州でも州園芸博覧会が開催されている．シュトゥットガルトが州都となっているバーデン＝ヴュルテンベルク州の園芸博覧会は，2014 年には，近郊のシュバービッシュ・グミュントという人口 6 万人の都市において開催された [6]．博覧会会場は，新興住宅地化が計画されている高台（Himmels-garten＝sky garden），高台と旧市街を結ぶ林道（Himmels-leiter＝sky ladder），旧市街でレムス川とヨーゼフ川に面したシュタットガルテン（Erden-reich＝earth rich）の 3 つで構成されている．この園芸博において特筆すべきは，これが単なる園芸の展示会あるいは新興地の開発ではなく，旧市街に対する大規模な都市改造と連動していることである．具体的には旧市街において，駅と旧市街を分断していた幹線道路のトンネル化，シュタットガルテンの河川沿いまでの拡張，両河川の多自然化などである．この都市改造は 1998 年のアイデアコンペから構想されており，むしろ大規模かつ複合的な事業を寿ぐという意味で園芸博覧会の招致が決定されたのである（応募は 2002 年）．Stefan Brückmann 氏（Atelier Dreiseitl）によれば，園芸博は元来，一般的な園芸の展示会であったが，10 年前ぐらいから，このシュバービッシュ・グミュントのように計画している様々な事業の完成を祝う機会として位置付けられるようになったそうである．

以上，ともに博覧会というイベントを通じたインフラ整備の事例を紹介したが，わが国でも国体道路といわれるような同様な整備と考えられるものも多いと考えられるかもしれない．しかし，その相違点として，そのイベントを契機として現在必要と思われるものを整備しているのか，ありうべき都市像を構想し，長期的な視点で進めているかという点や，構想や計画と市民の楽しみのある接点として，そのイベントを位置づけているかという点があるのではないかと考えている．

図 3　レムス川とヨーゼフ川の合流地点の様子

⑶規範性

規範性（model）とは，そのプロジェクトが個別的・具体的な課題を解決するだけではなく，汎用的な知見を提示するということである．

筆者は，2014 年の IABR（前出，テーマは Urban by Nature）に参加する機会を得た [7]．印象的であったのは，ニューヨーク都市圏にて行われているハリケーンサンディに対する復興計画「Rebuild by Design」に関するプレゼンテーションであった．特にホーボーケン市（人口 5 万）の取り組み [8]については，市長及び OMA の代表者の 2 名からのプレゼンテーションがあったが，取り組みの内容とともに，ホーボーケン市と同様に気候変動の影響に悩む世界中の都市に対して，この取り組みがモデルになるという強調されていた．

このような規範性は，視察したプロジェクトにおいて，異なる側面からも確認することができる．例えば，スペインのパンプローナ市に 2013 年に建設された Aranzadi

Park である[9]（**図 4**）．Abra 川の屈曲部に面したこの公園は，洪水時には水路となる帯状にくぼんだ緑地を有し，河川の氾濫を許容しつつ，歴史的な建築物の保全や農業振興を両立しているものであり，上述した「ルーム・フォー・ザ・リバー」などと同様の発想でデザインされているといえる．ではなぜ，このプロジェクトに規範性を見ることができるかと言えば，この整備には EU が大きく支援しているからである．この整備が，パンプローナ市のみに貢献するのであれば，EU からの予算は出ないであろう．すなわち，このプロジェクトにおける規範性が評価されていると考えるべきである．その他にも，ドイツのライプツィヒ市は人口減少に対応したまちづくりの先進地として著名であるが，当市でまちづくり活動を行っている「日本の家」の主催者である大谷悠氏によれば，市民を主体とした活動の意義を明確化し，連邦や EU から予算を獲得してくるということが行政の大きな役割であると述べていた．つまり，本来個別的である活動に規範性を発見あるいは付与するということが行政の役割ということである．

では，そのような規範性はどのように獲得されるのだろうか．筆者にとって，下記のエピソードが非常に印象的であった．研究室旅行に同行した時，終日議論する日程が一日確保されていたのだが，その議論が Nature とは何か，Landscape とは何かというテーマからスタートしたということである．Stokman 教授によれば，ランドスケープアーキテクトから地理学者，生態学者まで多様な人材が集まる研究室であるため，基礎となる概念の共有が重要だと考えたとのことであった．議論そのものは，大半をドイツ語で行われたために理解することは困難であったが，いわば‘そもそも論’をいとわない風土が，上述したような規範性を構築する豊かな土壌になっているのではないかということを強く感じることができた．

４．おわりに

最後に，以上に述べた包括性，戦略性，規範性という 3 特性について，概念的関係を**図 5** に示す．これらの特性は，言ってみれば，筆者が自己自身あるいは関わるプロジェクトについて，限定的・場当たり的・個別的でしかないという反省があり，それらを包括的・戦略的・規範的にしていきたいという願望が現れただけということも言えるかもしれない．あるいは欧州に限らず我が国を含めた世界中において，良いプロジェクトが必然的に有している特徴ということもできるかもしれない．しかし，市民との合意形成の重要性や EU という言語も異なる国々による集合体の存在などは，欧州の大きな特徴といえるだろう．

一方，仮に‘隣の芝は青い’的であったり，ごく当たり前な考察だったとしても，そのような考察から自らを反省することに意味はあると考えている．では私たちは今後，どのような活動を行っていけばよいのであろうか．筆者はその課題に対して，相矛盾するような二つの方向で行くべきではないかと現在は考えている．一つは学術的な側面として，日本的な‘景観’とは，‘景観デザイン’とは何か，欧米の発想に比較して，何が共通して何が相違しているのか，このような‘そもそも論’を，私たちの活動に規範性を獲得していくための基盤として深めていく必要があると考える．一方，実践的側面において包括性や戦略性を獲得していくためには，むしろ，‘景観’を主題化・目的化せずに，その他の社会的・環境的・経済的課題を解決し，あくまで結果論として景観が改善されるというアプローチが必要なのではないだろうかと考えている．そして，その包括的・戦略的な実践を，前述の‘そもそも論’を踏まえつつ，規範的に論じていくことも必要だろう．

以上，本稿で述べた考察あるいは今後の方向性については，まだまだ入念に検討されたものとは言えない．今後，広範な議論を展開していきたい．

図 4　Aranzadi Park の帯状の窪地

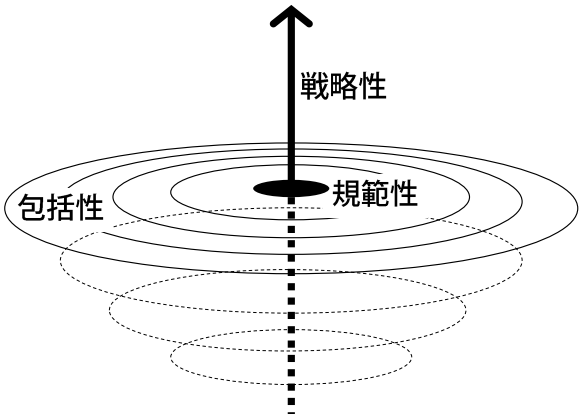

図 5　3 つの特性の概念的関係図

謝辞

シュバービッシュ・グミュントにおけるドイツ語文献に関しては，佐々木葉氏，佐瀬優子氏にご協力いただきました．ここに記して謝意を表します．

参考文献

1) Prominski, M., Stokman, A., Stimberg, D., Zeller, S.: River, Space, Design, Birkhaeuser, 2012
2) Stokman, A.: On Designing Infrastructure Systems as Landscape, Topology. Landscript 3, Jovis Publishers, pp.285-311, 2013
3) De Urbanisten: Water square Benthemplein, a+u 14:10, pp.20-28, 2014
4) Room for the River パンフレット: http://www.roomfortheriver.com/
5) ヘルト- ヤン ムールパス，ミシェル トーナイ: ナイメーヘン- レント地区におけるヴァール川拡幅計画のプランニングとデザイン，ランドスケープ研究 Vol.79 No.2, pp.96-98, 2015
6) Landesgartenschau Schwäbisch Gmünd: http://www.schwaebisch-gmuend.de/6039-Landesgartenschau.html
7) Brugman, G., Strien, J.: IABR-2014-URBAN BY NATURE, IABR, 2014
8) Resist, Delay, Store, Discharge: A Comprehensive Strategy for Hoboken, http://www.rebuildbydesign.org/project/oma-final-proposal/
9) Mayer, E.: River Park as a Place of Movement, Topos 89, pp.76-82, 2014